

中国語「得」補語文の構造

文 楚 雄

はじめに

中国語では一般的に次のようなものを補語として扱う。

1. 補語助詞「得」でつなぐもの¹⁾
 衣服洗得很干净。
 他高兴得不得了。
 这条河我游得过去。
2. 述語と補語が直接結合するもの
 老人家累坏了。
 文章写好了。
 小说看完了。
 他追上来了。
3. 述語の後に置く数量詞が補語となるもの²⁾
 这部电影我看过三次。
 北京我只去过一趟。
 这本小说他反复读了五遍。
4. 助詞「個」でつなぐもの³⁾
 把这件事问个明白。
 把经过说个一清二楚。
5. 「介詞」でつなぐもの⁴⁾
 等到下午五点。
 他生于一九五〇年。
 他来自上海。

本稿では補語助詞「得」でつなぐものだけを取り上げて考察することにする。「得」でつなぐものは次のようなものがある。

動詞が補語になるもの。

他气得哭了。

形容詞が補語になるもの。

四周安静得出奇。

副詞が補語になるもの。

天气闷热得很。

名詞が補語になるもの。

他哭得一脸的泪。

代詞が補語になるもの。

他竟糊涂得这样。

連語が補語になるもの。

我累得出了一身大汗。

他笑得比刚才更响亮、更长久。

文が補語になる。

太阳晒得我头昏眼花。

「得」は補語助詞として使うほかに、動詞、助動詞、語いの構成成分としてもよく使われるが、これらの使い方は別の問題だから、本稿では考察しないことにする。例えば、

他得了肺炎。(動詞)

我们不得不认真考虑这个问题。(助動詞)

我觉得情况不对头。(語いの構成成分)

一 「得」補語の発生

「得」という字はもともと動詞として使っていた。秦以前の時代では「得る、獲得」という意味の他動詞として使っていた。

得良师而友之。《荀子・性恶》

不以其道得之。《论语・里仁》

その後「得」は「得る」という意味から新しく「可能」を表わす意味が派生した。可能の意味を表わすこの「得」は単独或は動詞の前に置いて述語として使っていた。

欲免，得乎。

穰侯十攻魏而不得伤者，非秦弱而魏强也。《战国策・秦策三》

回也视予犹父也，予不得视犹子也。《论语・先进》

漢の時代では「得」の使い方には大きな変化が生じた。即ち「得」は動詞の前から動詞の後に置くようになった。

今臣为王却齐之兵，而攻得十城。《史记·苏秦传》

太公釣得巨鱼，剌鱼得书。《论衡·纪妖》

この時期には「得」は動詞の後に置いても、やはり「得る・獲得」という実の意味の品詞として使い、補語助詞にはまだなっていなかった。潘允中氏の考察⁵⁾によるとおよそ南北朝時代から「得」は実の意味がだんだん無くなり、完全な助詞として使い始めた。

凡种小麦地，……，至春能锄得两遍，最好。《齐民要说·杂说》

秋耕不堪下种，无问耕得多少。《同上》

一方、岳俊発氏の考察⁶⁾では、動詞の後に置く「得」は後漢の末期ごろから「得る」という意味から動作の完了を表わす意味が発生したと指摘している。

先嫁得府吏，后嫁得郎君。《焦仲卿妻》

医得眼前疮，剌却心头肉。《咏家田》

「得」はこの動作の完了の意味から補語をつなぐ補語助詞に変わったのである。

锄得五遍以上，不须耩。《齐民要术·种谷》

清泉洗得洁，翠靄侵来绿。《樵檐》

また氏の考察によると、可能補語をつなぐ「得」も「可能」の意味から発生したのだと指摘している。

子曰：“里仁为美，择不处仁，焉得知？”《论语·里仁》

田为王田，卖买不得。《后汉书·隗嚣传》

气象四时清，无人画得成。《处州洞溪》

一方、楊建国氏の考察⁷⁾では可能補語は晋の時代には既に否定式が出現したと指摘している。

楼高望不见，尽日阑干头。《西洲曲》

两箱悬崖数万仞，窺不见底。《水经注》

このようにこれまでの諸研究の成果をまとめると、およそ次のようなことが言える。

補語助詞「得」はもともと「得る」という意味の動詞として使われていた。およそ『論語』の時代から動詞の「得」は「可能」という新しい意味が発生した。この可能の意味を表わす「得」は動詞として単独で述語になったり、助動詞として述語動詞の前に置いたりして使っていた。漢の時代ごろからこの「得」は大きな変化が

生じた。即ち動詞の前から動詞の後に置くようになった。しかし最初は動詞の後に置いて、「得」はやはり「得る」或いは「可能」の意味を表わすものとして使っていた。およそ南北朝時代ごろから動詞の後に置く「得」は実際の意味がだんだん薄くなり、助詞としての機能が強くなり始めた。大体唐の時代から動詞の後に置く「得」は補語をつなぐ完全な助詞として成立したのである。そして今日まで続いてきた。しかし「得」でつなぐ補語文は現在のような形になるまでにはやはり幾つかの変化があった。特に現在では使わない構造があった。先ず次の構造を見てみよう。

述語+得+目的語+補語（V得OC）

知府道：“我正连日事忙，未曾问得你个仔细。”《水浒》

跟随的人又不少，个个要奉承得他好。《醒世恒言》

この構造は宋・元時代ではよく使われていたが、清の時代ごろから用例がとてま少なくなった。王力氏の考察⁸⁾では『紅樓夢』にはこの構造は殆ど見られなく、一例しか見付かっていないと指摘している。一方、岳俊発氏はこの構造は清の時代になっても依然としてよく使われていたと反論している⁹⁾。この構造は何時完全に消えたのかまだはっきり分らないが、いずれにしろ現代中国語ではもう殆ど使わなくなった。また次のような構造も宋・元時代にはあったが、現代中国語では殆ど使わなくなった。

述語+目的語+得+補語（VO得C）

你娘念你得很。

亦知太以敬来做事得重。《河南程氏遗书》

可能の意味を表わす補語の場合も現在使わない構造があった。

不+述語+得+補語（不V得C）

我并不理会得来。《元代白话碑集》

便于天理不湊得着。《朱子类语・训门人》

この構造は宋・元時代にはすこしあったが、明の時代以後は使わなくなった。続いて次の構造を見てみよう。

述語+得+目的語+補語（V得OC）

打得我贏。

述語+得+補語+目的語（V得CO）

做得成诗。

この二構造は唐の時代に発生し、宋・元時代から多く使われるようになったと指摘されれている。また宋・元時代ではこの二構造は共存していたが、その後変化が起

きて、「V得OC」の方がだんだん使わなくなった。楊建国氏の考察¹⁰⁾では「V得OC」の構造は宋代以後はだんだん少なくなり、元代以後は完全に消えてしまったと指摘している。一方、岳俊発氏の考察¹¹⁾では「V得OC」構造は元代には消えるどころか、明代になっても「V得CO」構造よりも多く使われ、清の時代になって始めて少なくなったと指摘している。いずれにしろ宋・元時代に共存していた可能の意味を表わす「V得OC」、「V得CO」二構造は「V得OC」の方が勢力がだんだん衰えて最後に使わなくなったのに対して、「V得CO」の方が一向に衰えることなく今日に至った。

このように唐の時代に成熟した補語助詞「得」から構成される補語文は現在のよくな形になるまでには種々な変化があったのである。

二 「得」補語文の構造

本章では補語助詞「得」でつなぐ補語文の構造を具体的に考察して行くが、主として「得」前の部分、「得」後の部分、前の部分と後の部分との関係などに焦点を絞って考察して行きたいと思う。

2-1. 「得」前の部分

2-1-1. 補語助詞「得」の前に来る品詞は動詞、形容詞でなければならない。名詞などはありません。

他笑得肚子痛。(動詞)

天气热得受不了。(形容詞)

这篇文章得很。×(名詞)

しかし次のような用例が示しているように、「得」の前には動詞、形容詞以外の品詞が置かれている。このような場合の「得」は本稿で考察する補語文の問題に属せず、別の文法問題になる。

这个厂子穷得要买帐本都得向个人手里借钱去。(《获奖作品》¹²⁾)

什么时候人也得吃饭，工厂也得生产。(同上)

严峻的生活迫使他不得不认真考虑自己的前程。(同上)

在哈尔滨过冬，总得储备点几秋菜煤拌啊。(同上)

2-1-2. 動詞・形容詞と「得」との間には可能補語否定の場合を除いて、他の言葉を加えることができない。

他笑得肚子痛。→他笑不得肚子痛。×

他笑得很得肚子痛。×

他笑我得肚子痛。×

2-1-3. 動詞・形容詞の後には「着・了・過」のような時態助詞も加えることができない。

他走了得很累。×

他写过得很好。×

他看着得很认真。×

2-1-4. 「得」の前に来る動詞・形容詞は単音節のものも双音節のものもあるが、単音節のものが多い。

可是，我和我的同事几乎被他们的安排挤得透不过气来。(《获奖作品》)

在外汇使用上也套用这办法弊病很多，不灵活，往往弄得小事办不好，大事办不成。(同上)

尽管他冻得叫不出声来，可他还要叫。(同上)

次は双音節の用例である。

是上午三竿的时候了，天空暗淡得象黄昏一般。(《获奖作品》)

听到你的消息，我简直象在做梦，全家人高兴得象过节。(同上)

2-1-5. 「得」前の動詞・形容詞は副詞などの修飾を受けることができる。

这话看起来挺平常，但当时，我确实感动得掉泪了。(《短篇选》¹³⁾)

他们那已经冻得发黑了的脚，又流出了鲜红鲜红的血。(《获奖作品》)

父亲接待他们时，门窗都关得严严的。(同上)

しかし否定の意味を表わす副詞「不」、「没有」はあまり動詞・形容詞の前に置かない。

他站得笔直。→他不站得笔直。×

他唱得很好。→他没有唱得很好。×

他忙得昏天黑地。→他不忙得昏天黑地。×

2-1-6. 「得」の前に受け身の意味を表わす「被」などの連語を置くことができる。

他已经被冻得说不出话来了，但是他心里明白他得救了。(《获奖作品》)

那贴在墙上的红绿绿的大标语，已被寒风刮得残破不全了。(同上)

女主人给搞得不知所措。(《短篇选》)

2-1-7. 「得」の前に使役の意味を表わす「使」などの連語を置くことができる。

一个维吾尔族人都不避嫌疑接待他，这使朱维民感动得泪花直进。(《获奖作品》)

“你的信我读了好多遍。”妻子轻轻的一句使他的心跳得更快了。(同上)

2-1-8. 「得」の前に「把」で構成される連語を置くことができる。

接着烧起了大火，把四周映得如同白昼。(《获奖作品》)

说着，颤巍巍扬起手臂把那些钱打得四散飞扬。(《短篇选》)

2-1-9. 「得」の前に「連……都」、「比……都」などのような連語を置くことができる。

史无前例的年月，连春天都来得晚。(《获奖作品》)

然而，他们到死连对自身也糊涂得很。(《短篇选》)

2-1-10. 「得」の前の動詞・形容詞が重複し、その間にコンマを加えて分断させる。

那味道是那样强烈，强烈得使我窒息。(《短篇选》)

天空是一种奇怪的黄，黄得竟象熟透的黄瓤西瓜那般。(同上)

买水人用手将瓶子搓着转，转得咔咔地响。(同上)

重複する時にはその前の動詞は目的語を伴うことができる。

他讲英语讲得很流利。

“你看着办吧，来点蛋糕和小点心，看电影看得肚子都饿了。”(《短篇选》)

甚至蹲了臭儿的脖领子，蹲得高出半截的臭儿弓下腰来。(同上)

2-2. 「得」前の主語の問題

2-2-1. 「得」前の動詞は施事主語を伴う。

锁谷讲得长马脸上麻子通红，众人听得如梦如痴。(《短篇选》)

我活得不成个人啦！没人帮我说句公道话啦。(同上)

2-2-2. 「得」前の動詞は受事主語・話題主語を伴う。この場合の主語は動作を行う主体ではなく、ただ構造上に於いて文の主語の位置にあるだけで、意味及び動詞との係わりから見れば、むしろ動作を受ける対象となる。

事干得多，麻烦惹得多，人得罪得多，他都大大咧咧，满不在乎。(《获奖作品》)

锅三家的脸子愈发光润，雪花膏抹得也很厚。(《短篇选》)

青石沟这一回村宴，只吃得人仰马翻，只喝得天昏地暗。(同上)

2-2-3. 「得」前の動詞の主語が前の文の主語と同一の場合はよく前の文の主語を受けて省略される。

黑狗毫不收敛，[] 将绳子拉得与身体成一条直线。(《短篇选》)

他跑下山来，[] 跑得很快，[] 喘得很急，撞着了一个男人，吓跑了一只野猫。(同上)

2-2-4. 「得」前の動詞の主語は特定の人などを指すのではなく、一般の人々などを

指す場合にはよく省略される。

她现在并没有发生什么事，[] 就闹得她焦头烂额，躲都没处去躲。（《短篇选》）
稍一静心，[] 就听得见它们滋滋生长的快乐呻吟。（同上）

2-2-5. 「得」前の動詞の主語は前文の目的語を受けて省略される。

巨大的鵝鷹在岩壁间窄小的空间盘旋，卷起一股股风，[] 刮得碎石叫唤着直滚。（《短篇选》）

天上的星星出神地听着这对兄弟在互吐心曲，不时还爆发出一阵欢笑，[] 震得庭院里的树叶瑟瑟作响。（《获奖作品》）

2-2-6. 「得」前の動詞の主語は前文の連体修飾語を受けて省略される。

你的问题一解决，[] 一定会变得年轻起来，欢乐起来。（《获奖作品》）
现在我的地位变了，就要走，[] 怎么对得起你们。（同上）

2-2-7. 「得」前の動詞の主語は前の文の場所、時間などを表わす連用修飾語を受けて省略される。

他许久才抬起头来，眼睛里亮着一汪水，[] 被残阳映得发红。（《短篇选》）

2-2-8. 「得」前の動詞の主語は前の文の「兼語」成分を受けて省略される。

强拗了他去，[] 也玩得别别扭扭，大家扫兴，妈妈也扫兴。（《短篇选》）
她想，她妈领她出去散步，也许为了[] 不致被这些说教逼得精神分裂吧。（同上）

2-2-9. 「得」前の動詞の主語は前後の関係から見てはっきりしている場合は分脈上の意味を受けてよく省略される。

又顺流游泳，逆流上来。[] 游得累了，仰面躺在水上，看蓝蓝的天。（《短篇选》）
爹笑了，是焦急后的笑，是等待后的笑，是担心后的笑，[] 笑得有点勉强，有点苦涩，有点疲劳。（同上）

2-2-10. 「得」補語連語が連体修飾になる時には「得」前の動詞・形容詞の主語は後の被修飾語そのものである場合はよく省略される。

当年听得如醉如痴的官大中，如今就站在这条锦带的末端。（《获奖作品》）
他看见了已经爬上岸，冻得龇牙咧嘴的伯克。（同上）

2-2-11. 「得」前の動詞の主語は後の文の主語を受けて省略される。

“赔？[] 说得轻巧，你赔得了吗？”（《短篇选》）
[] 看得出他是想靠近我，我更想靠近他，我要说明我不是工友们所说的那种缺德冒烟儿的家伙。（同上）

2-2-12. 「得」前の動詞の主語は「得」補語の成分を受けて省略される。

可是吃国家，吃社会主义，吃企业老本，[] 吃得我們自己也惭愧。(《获奖作品》)

别的没什么，[] 那些日子倒是饿得我直打晃。(《短篇选》)

2-2-13. 上述では主として「得」前の述語が動詞である場合の主語について考察してきたが、「得」前の述語が形容詞からなる場合にはその主語はあまり省略しない。

肆虐了一天的雪暴停息下来了，整个夜空静得犹如几万万年前远古时代。(《获奖作品》)

厂里的设备老得不能用。(同上)

会议开始前的这段时间，场内准会热闹得象个大集市。(同上)

生意好得很，老婆俊得很。(《短篇选》)

2-2-14. 「得」前の述語が形容詞の場合でも前後の関係がはっきりすれば、その主語は省略することがある。

在收音机旁，陈秀云听着全会的公报，[] 高兴得掉下了欢喜的眼泪。(《获奖作品》)

早几天，家里炸油馓子，烤点心，炒瓜子，……[] 忙得不亦乐乎。(同上)

2-3. 「得」後の部分

この節では「得」後の部分、即ち「得」補語文の中心部である「得」補語について考察して行く。「得」補語は形容詞、動詞、副詞、名詞、代詞及びそれらの品詞の連語、文などから構成される。

先ず形容詞の場合を見てみよう。

2-3-1. 補語は何の修飾成分もない単独の形容詞から構成される。

在西方也远非每个人都过得豪华。(《获奖作品》)

陈炳富心里也翻腾得厉害，慌乱地说，……。 (同上)

小老弟同行一程前头就分手罗，走这半天反跟得紧，好象他们是……。 (《短篇选》)

2-3-2. 補語は「的」を伴う形容詞から構成される。

几件新衣叠得好好的，放在枕头下。(《短篇选》)

现在我们学校斗得乱哄哄的，我就跑到新疆来画画。(《获奖作品》)

只见父亲的脸上一片阴霾，眉头皱得紧紧的。(同上)

2-3-3. 補語は四字の形容詞連語やAABB式の形容詞から構成される。

每天站柜台，累得腰酸腿痛，难免肝火上升。(《获奖作品》)

人们跑得口干舌燥，想找茶室、餐厅都很难。(同上)

布谷鸟叫得朦朦胧胧，不知它在天上地上还是山林杳冥里。(《短篇选》)

2-3-4. 補語は副詞など種々な連用修飾語を伴う形容詞から構成される。

也提高了听和说法语的能力，饭也吃得特别香。(《获奖作品》)

你找个地方睡觉，睡完觉再说。他话说得挺轻松。(《短篇选》)

他们虽然当了官，可日子过得比当兵时还清苦。(《获奖作品》)

她又赢得了在当时糟得不能再糟的学校食堂搭伙的胜利。(同上)

2-3-5. 補語は「又……又……」形式の形容詞連語から構成される。

既要照看娃儿，伺候他，还得下地，本来画儿般的人劳得又黑又瘦。(《短篇选》)

它一边转一边咬，后来又倒退着拉绳，使它的身体拉得又细又长。(同上)

2-3-6. 補語は「那样、那么」などを伴う形容詞連語から構成される。

他弹得那样优美，那样和谐。(《获奖作品》)

他背靠井架，鼾声如雷，睡得那样沉、那样甜。(同上)

他谈得那么自然，酣畅，好象一切都不值得惊奇。(同上)

2-3-7. 補語は並列した多数の形容詞連語から構成される。

她看着那镜子，用一把断齿的化学梳子在慢慢梳头。她梳得很小心，很慢，很仔细。(《短篇选》)

“我可以睡地板。”她说得那么恳切、真诚、严肃。(《获奖作品》)

也许是改革的浪潮来得太突然，太迅猛了。(同上)

2-3-8. 補語は「一些」などのような補足説明の成分を伴う形容詞連語から構成される。

他们不停地给自己“注气”，使兴奋的中枢神经兴奋得更强烈一些。(《获奖作品》)

金沙江仿佛也要喘口气，变得平静些了。(同上)

他是个二十出头的青年汉子，身架子不小，却长得秀条了一点，脸庞也白净了一点。(《短篇选》)

2-3-9. 補語は「不」を伴う否定式の形容詞連語から構成される。

三哥，我帮得不够，帮得不好。(《短篇选》)

刘八嫉驰到了阴间，有了一条街，还怕过得不安逸？(同上)

在柜台里打得不过瘾，还追出来打，有时几个售货员围打一个。(《获奖作品》)

2-3-10. 補語は主・述構造の形容詞連語や文から構成される。

某国公主途经广州，带着陪同人员到南方大厦来买梳子，看了几把，看得售货员不耐烦了。(《获奖作品》)

心里好象有什么东西拱破那些皱皮尖锐地长起来，弄得他身上一阵一阵地燥热。(《短篇选》)

巨大的吊灯从天花板上垂下，照得远近一片金碧辉煌。(同上)

次に動詞の場合を見てみよう。

2-3-11. 補語は目的語を伴う動詞連語から構成される。

他的胡须、头发长得遮住了脸庞。(《获奖作品》)

他背后跟着一条雄健异常的黄牛，懂行的人一看见它就会喜欢得忘了老婆。(《短篇选》)

男人馋得流口水，丑女恨得瞎磨牙。(同上)

夸你写信写得好，文墨好，写得动人心。(同上)

2-3-12. 補語は種々な連用修飾語を伴う動詞連語から構成される。

她听见矿车斗子里的钢板被蹭得啞啞作响，里面夹杂着只好意会不能言传的声音。(《短篇选》)

而豹子好不容易轮到歇息，早就躲得远远地睡去了。(同上)

一张脏兮兮的黑头帕，在他刺溜光的鸡蛋脑壳上缠得很不成章法。(同上)

连长高兴得朝我胸脯重重地奖赏了一拳。(同上)

2-3-13. 補語は四字の動詞連語や成語から構成される。

商店还没到营业时间，门前就挤得水泄不通。(《获奖作品》)

任他讲得天花乱坠，也引不起别人的兴趣。(同上)

她接着想起了丈夫让那张魔纸弄得神魂颠倒的情景。(《短篇选》)

邻居家早就折腾得翻天覆地了。(同上)

2-3-14. 補語は固定した慣用連語から構成される。

如果把人放进里面，就会化得连一块骨头都不剩。(《短篇选》)

她第一个早晨从小房子里出来时，面孔血红，怕惊怕风，羞得连气都喘不上来。(同上)

“既然如此，算我白说。”我被噎得差点儿气都上不来。(同上)

一般说来，死者的年事越高，子孙越多，丧仪就办得规格越高，越隆重。(同上)

2-3-15. 補語は趨向動詞や補足説明成分を伴う動詞連語から構成される。

她一下子惊讶得回过头来，盯着我，好象我在危言耸听。(《短篇选》)

[公主]回到宾馆无心对镜理红妆，气得哭了一场。(《获奖作品》)

2-3-16. 補語は「兼語」を伴う動詞連語から構成される。

他的表情严肃得叫我想笑，好象这几十年里，他日日月月想的就是这顿饭。(《短篇选》)

妈妈温柔地抚着我的头发，温柔得让我窒息。(同上)

2-3-17. 補語は「是」連語から構成される。

他摔得到处是血。

然而系里的事却很不顺利，是一忧。且忧大于喜。弄得他总是一副心力交瘁的样子。（《短篇选》）

2-3-18. 補語は可能の意味を表わす連語から構成される。

猜测胎儿是男是女，弄得孙媳妇面红耳赤，笑也不是，哭也不是。（《短篇选》）

[他]不歇气的“甬害怕”开了，恁得先生哭笑不得。（同上）

2-3-19. 補語は多数の並列した動詞連語から構成される。

一排袷搭扣扣得熨熨贴贴，一丝不苟。（《短篇选》）

他们象她年轻时一样，被成吨成吨的钢铁逗弄得一会儿哭，一会儿笑，一会儿激动。（同上）

2-3-20. 補語は「象」などのような比況を表わす連語から構成される。

无锡有一个大队生产的保温杯就堆得象小山似的。（《获奖作品》）

春儿的眼红得象两朵花，水汪汪的可爱又可怜。（《短篇选》）

本来是微弯的背，如今弯得如一张犁。（同上）

一歇手她就嚎叫，叫声惨急得如同被黄鼠狼咬住脖颈的鸡。（同上）

2-3-21. 補語は主・述構造の連語や文から構成される。

那钻机般的粗音大噪，震得全队人耳朵嗡嗡作响。（《获奖作品》）

二十九秒……三十五秒……石顺科感到体内胀得五脏六腑都要爆开来。（同上）

巨大的鹞鹰在岩壁间窄小的空间盘绕，卷起一股股风，刮得碎石叫唤着直滚。（《短篇选》）

他爸一辈子做人谨慎，还那样规行矩步，弄得他人也随着拘拘束束的。（同上）

以上は形容詞、動詞が補語になる場合の状況を見てきたが、次はその他の品詞の場合を見てみよう。

2-3-22. 補語は副詞から構成される。補語になれる副詞は大変限られており、程度を表わす「很」や「不得了」などわずかなものしかない。状態、時間、範囲、否定、語気などを表わす副詞は補語として使えない。

会场热闹得很。○（程度副詞）

会场热闹得不得了。○（程度副詞）

会场热闹得十分。×（程度副詞）

会场热闹得非常。×（程度副詞）

会场热闹得正在。×（時間副詞）

会场热闹得悄悄。×（状態副詞）

会场热闹得全部。×（範囲副詞）

会场热闹得没有。×（否定副詞）

会场热闹得大概。×（語気副詞）

自从那次课堂睡觉以后，他改邪归正，用功得很，也因此瘦得更加厉害。（《短篇选》）

[她]是个五大三粗的黑脸妇人，厉害得很，进门就点着王全的名字骂。（同上）

2-3-23. 補語は「怎么样」などのような代詞から構成される。

不知她父亲的病怎么样了，她在新乡考得怎么样。（《短篇选》）

他现在日子过得怎么样了？（《获奖作品》）

2-3-24. 補語は名詞連語から構成される。

那些铁板把孩子们弄得一脸哭相。（《短篇选》）

张佑才，这位十年前“南化院”的高材生，在变化无穷的化学公式前面表现得 outcomes 出类拔萃的聪颖和才智。（《获奖作品》）

2-3-25. 「得」後の補語は省略される時もある。

他把我气得。

你看他急得。

2-4. 「得」前の部分と「得」後の部分との関係

2-4-1. 補語は「得」前の述語を説明する。

伤员的脸全用纱布裹得紧紧的。（《短篇选》）

天应该在上边，海应该在下边，它摇摆得厉害，我觉得象坐在一个流动的球状容器里。（同上）

她在车棚里把身子缩得更紧了。（同上）

说着，便对汪百龄看了一眼，笑笑，笑得很甜美。（同上）

[她]热衷于帮人介绍对象，贴钱费力还受气，还是干得有滋有味。（同上）

この場合の補語は述語の程度、状態を説明し、基本的に運用修飾語として述語の前に置き換えることができる。

2-4-2. 補語は「得」前の主語を説明する。

大弟已经筋疲力尽，眼睛都熬得红红的。（《短篇选》）

小弟听得洋洋得意，这笔生意有点把握了。（同上）

她的声音小得象蚊子哼。（同上）

“走哇，看驴驹子放屁去呀。”声音高得一直送入痰主的耳朵。(同上)
山野变得更加荒凉寂寥了。(同上)

この場合の補語は主語を説明する述語に置き換えることができる。

2-4-3. 補語は「把」を使った目的語を説明する。この場合の補語は目的語と主・述の関係に置き換えることができる。

各家拿出扫帚把巷子扫得干干净净。(《短篇选》)
“别谦虚了，看你把这屋子装修得象宾馆似的。”(同上)
树上的风溜下来，把塑料布和破席头打得沙沙响。(同上)
不想做儒夫，我把腰杆儿拔得溜直。(同上)

2-4-4. 補語は主・述構造の連語から構成される時にはその主語が意味上では「得」前の述語の目的語に当る場合には「把」を使って「得」前の目的語に置き換えることができる。

钱是一块磁铁，吸得几个姑娘粘着他。(《短篇选》)
一种温暖的家庭气氛又象往日那样弄得他有些醉。(同上)
立时就觉得一股凉气在心里旋，凉得他很想立刻就抱住胳膊圪蹴下去。(同上)
有了钢琴还得有套大房子，还得搬出小巷子，要不然吵得左邻右舍不能睡。(同上)

2-4-5. 補語の主語と「得」前の主語とは全体と部分の関係となっている。この場合では補語の主語を「得」前の主語の直後に置き換えることができる。

汪师母拿得手都发抖了，七七八八就有一千几。(《短篇选》)
当找来使馆负责招聘的中国人时，玛丽一若瑟激动得声音不住地颤抖。(《获奖作品》)
汪师母感动得眼泪都出来了。(《短篇选》)

2-5. 「得」補語が表わしている文法の意味

2-5-1. 程度を表わす。

连十五、六岁的娃娃都赚了，就他赔得一塌糊涂。(《短篇选》)
那些年，八舅家的日子过得火爆爆的。(同上)
王跛子那时穷得叮咣响，仅有的百元还是临走时借的。(同上)
六舅夫妇俩急得心里冒烟，转出转进。(同上)
那条因为马车翻进沟里砸伤的腿瘸得更厉害了。(同上)

2-5-2. 結果を表わす。

嗓音都变了，嘶哑得象鸭叫一样，惹得那些拥挤在架子车旁的眼睛惊奇地看着他。

《短篇选》)

两人象孩子一样，在操场上你追我赶，终于将黑脸妇人赶得一蹦一跳地走了。(同上)

都是你们这台破电话，怎么叫也打不通，害得我往这儿跑一趟腿。(同上)

自此，八舅性格明显地变了，变得多疑而古怪。(同上)

2-5-3. 状態表わす。

回来时就没事了，水满得一路上泼泼洒洒。(《短篇选》)

裤子咋这么窄瘦，把屁股沟都裹出来了，两条腿紧得象打枣的麻杆。(同上)

屁股朝后压在脚上，上身挺得水葱似的。(同上)

周伟看着他为那个包累得气喘吁吁，本想站起来抢过去替他挂好。(同上)

一换再换，一直换到电教中心的放映室，学生还是挤得象沙丁鱼罐头。(同上)

2-5-4. 時間を表わす。

八舅照例去得很晚，从容不迫，斯斯文文的。(《短篇选》)

“来啦，你们干得真早呀。”(同上)

“你比我起得还早！”(同上)

有天晚上，回来得很晚，嘴巴油光光的。(同上)

她又幻想，他可能走得晚了一点。(同上)

信很简短，字是歪歪斜斜的，象是写得很仓促。(同上)

2-5-5. 数量を表わす。

人来得很多，且听众成份复杂。(《短篇选》)

客人饿的时间长了，吃得多。(同上)

加之，扁豆稀饭灌得太多，刚躺下不久，就赤条条下炕尿了几次。(同上)

小诊所，一次不敢买得太多。(同上)

接近夏天的时候，最末一茬蚕要茧了，吃得特别多。(同上)

这一担桑叶采得特别多，箩筐装得冒了尖。(同上)

她吃得很少，也很少说话，光看我。(同上)

2-5-6. 判断を表わす。

我相信我考得不错。(《短篇选》)

高考有考得好的，有考得坏的，有哭的，有笑的。(同上)

信写的多，也写得有情意。(同上)

死，也要死得有价值，不能让人……。《获奖作品》)

列宁说得对，民族问题实际上一个阶级问题。(同上)

三 可能の意味を表わす「得」補語文の構造

可能の意味を表わす可能補語は次のような基本式がある。

肯定式 述語+得+補語 (V得C)

否定式 述語+不+補語 (V不C)

肯定式 述語+得 (V得)

否定式 述語+不得 (V不得)

可能補語は肯定式より否定式の方が使う頻度が高いと言われている。劉月華氏の考察¹⁴⁾によると、四人の作家の百五十万字の作品には否定式の「V不C」の用例が1121例であるのに対して、肯定式の「V得C」の用例がわずか42例しかなく、否定式は肯定式の約三十倍にもなっている。また「V得」、「V不得」の場合も否定式の238例に対して、肯定式の「V得」がわずか18例しかないと指摘している。では可能補語文の構造を具体的に見てみよう。

3-1. 「得」・「不」前の部分

3-1-1. 形容詞が「得」・「不」前の述語になる。この場合は普通肯定式がなく、否定式しかない。先ず単音節形容詞の用例を見てみよう。

周伟气不得，恼不得，一股说不出的愤懑在他的胸中冉冉升起。(《短篇选》)

来……来运动，他们好不了！(同上)

对付他们，我们的手软不得。

次は双音節形容詞の場合を見てみよう。

这次考试至关重要大意不得。

他紧张不得，一紧张就得病。

3-1-2. 動詞が「得」・「不」前の述語になる。この場合は肯定式より否定式の方がよく使われる。また肯定式・否定式を連用にして使うこともよくある。先ず単音節動詞の用例を見てみよう。

八舅忍不住了，筷子一摔，愀然变色，拂袖而去。(《短篇选》)

厂长书记做得到，哪个还敢磨蹭。(《获奖作品》)

“今天你倒说说，是放得放不得？”(同上)

喜云俊她看得出来。(《获奖作品》)

次は双音節動詞の用例である。

当然他估计得到，不出多久，又会有人议论。(《获奖作品》)

无奈三言两语也疏导不通，弄得不好，逆反心理加重，更不利于教育。(《短篇选》)

“这个这个”我推诿不过去。(同上)

3-1-3. 「得」・「不」前の動詞には「可以」、「能」などの助動詞を置くことができる。

此时，在人们的心灵上空弥漫的不安的阴云，可不是“老社员”几句诙谐幽默之辞能驱得散的。(《获奖作品》)

破碎了的小船，还能经得起狂浪迎头撞击么。(同上)

3-1-4. 「得」前の述語には「没有」などの否定語を置くことができる。

艳红的火光在脸上跳，乌油油的头发没来得及梳，散披在肩上。(《短篇选》)

第二天搬家的汽车就到他家门口，他什么也没有来得及收拾。(同上)

这些话，姚长安自然不太听得到，就是听到了也不容易搞得很明白。(同上)

3-1-5. 「得」・「不」前の述語には種々な連用修飾語を置くことができる。

他其实也谈不上什么交往，只是跟范正宇说话的回数多些。(《短篇选》)

这回要评不上，看你脸往哪里搁。(同上)

我那表哥只会死卖力气，连个囫圇话都说不全。(同上)

八舅的几个儿子确实算得上孝子，经常寄钱寄物自不必说。(同上)

这一次要再上不去，就很难说得过去了。(同上)

3-1-6. 「得」・「不」前の述語にはよく施事、受事、場所、時間などの主語が伴う。また前の文の主語などの成分を受けて、その主語が省略される場合もある。

我要对得起头儿，我想到过报恩。(《短篇选》)

昨天盘缠又花干了，豆腐脑也吃不上。(同上)

我看清了他是谁，他就是头儿。[] 看得出他是想靠近我，我更想靠近他。(同上)

3-2. 「得」・「不」後の部分

3-2-1. 形容詞が「得」・「不」後の補語になる。

过去他们吃得饱，住得好，讲卫生。(《获奖作品》)

他被林子里数不清的王立秋的影子折磨得睡意全消。(《短篇选》)

因为在外面逛得久，结交广，把世事看得透，也就把钱看得淡淡。(同上)

他一面走一面对自己说：“我是怕干不好才没动这个念头。”(同上)

3-2-2. 動詞が「得」・「不」後の補語になる。

他一身煤黑，满脸汗水，有时饭都顾不上吃。(《获奖作品》)

东西一出门就与商店无关，管你搬得动搬不动。(同上)

这是我们女人的事，只有女人才说得通。(《短篇选》)

“呸，太麻烦！太麻烦，这么多规矩如何记得住？”(同上)

但他是一个豁达之人，洒下几掬悲怆的老泪后，痛定思痛，也想得开。(同上)

3-2-3. 趨向動詞が補語になる。

只要肯出钱，什么样式他都做得出来。(《短篇选》)

那罪孽再结实的身子骨也让他熬不过去。(同上)

大圈滩，顾名思义，进得来就给圈住出不去了。(《获奖作品》)

数得过来要收，数不过来也得收。(同上)

拿得起，放得下，却也泰然洒脱。(同上)

高血压是富贵病，你想得还得上呢！(《短篇选》)

3-2-4. 「了」が「得」・「不」後の補語になる。

有了这文凭，我敢肯定他们闯得了普天下的麻场牌局。(《短篇选》)

他们怕棉花卖不了，大葱也赚不着钱，白搭了功夫和脚力。(同上)

我早就说过，城里猪肉吃不了，在仓库搭了好几年了，能不有点味么？(同上)

没五百块钱人家不让住院，不开刀就活不了命。(同上)

3-2-5. 補語が「得」・「不得」だけで構成される。

福也享得，穷罪也受得，闲心不操，乐乐呵呵。(《短篇选》)

关仲乐慌忙跑过来拦他：“使不得，使不得，……。”(同上)

骨是象骨，竹骨镶嵌得不露痕迹，一如天然一块黑白两色的整体，是那种胶活儿比不得的。(同上)

“石书记，浪太大，小船去不得呀！”推小船的同志和其他船员纷纷劝阻。(《获奖作品》)

3-2-6. 可能補語の後に目的語を置くことができる。双音節趨向動詞の場合には目的語は双音節趨向動詞の間に置く。

现在我的地位变了，就要走，怎么对得起你们。(《获奖作品》)

做不起人，抬不起头。(同上)

可是，我和我的同事几乎被他们的安排挤得透不过气来。(同上)

尽管他已冻得叫不出声来，可他还要叫。(同上)

不是更有“新话”，碗大的公章抵不上小脸蛋一个吗？(《短篇选》)

3-3. 可能補語が表わす文法の意味

3-3-1. 補語が形容詞・動詞から構成される場合は主観的或は客観的条件がある種

の動作の実現を許容するかどうか、或いは動作の結果を示すという意味を表わす。

我常对自己说：“政府的事用得着你来管么？”（《短篇选》）

一下子没有车辆声说话声，甚至连呼吸声都听不到了。（同上）

这黄河白日里是看不见的，只有在没有月光的夜里，它才从河床上凸来。（同上）

3-3-2. 補語が趨向動詞から構成される場合は主観的或は客観的条件がある種の動作の実現を許容するかどうか、或いは動作の方向を示すという意味を表わす。

〔老闺女〕至今瘫在炕上嫁不出去。（《短篇选》）

花瓦托在楼角叠起的杉木飞檐上，搭眼就看得出这家准是地主。（同上）

茅草屋很旧，门窗关不上，草屋顶年深月久，发霉腐烂。（同上）

没有开灯，外面的光透不进，屋里因此就黑。（同上）

3-3-3. 補語が「了」から構成される場合は主観的或いは客観的条件、能力がある種の動作の実現を許容するかどうかという意味を表わす。この場合は動作の結果や方向とは関係がない。

这封信我写不了。→書く能力がない。

这封信我写不完。→書き終えない。

这酒太烈了，我喝不了。

今天有急事，晚上的电影看不了了。

猪多了，吃不了，能眼看着让国家受损失吗？（《短篇选》）

3-3-4. 「得」・「不得」が補語になる場合は主観的或いは客観的条件がある種の動作の実現を許容するかどうか、または情理上或いは環境上から許すかどうかという意味を表わす。

他们感到的一定是痛苦，我象做了见不得人的事一样，急忙从河里爬起来。（《短篇选》）

非人非类，算不得贤良之辈，怪不得断子绝孙。（同上）

你一个人去得吗？

这件事说得说不得？

四 構造及び意味の比較

4-1. 連用修飾語と「得」補語との比較

4-1-1. 副詞「很」は補語として「得」の後に置くこともできれば、連用修飾語として述語の前に置くこともできる。

天气热得很。→天气很热。

这里的物价贵得很。→这里的物价很贵。

どちらも程度を表わすものであるが、補語として表わす程度と連用修飾語として表わす程度を比較すると、補語として表わす程度の方が高い。

補語として使える副詞は「很」のほかに「不得了」などがあるが、「很」のように簡単に連用修飾語として述語の前に置くことができない。

商店里人多得不得了。→商店里人不得了地多。×

他高兴得不得了。→他不得了地高兴。×

4-1-2. 動作や変化の状態を表わす補語の中には一部分のものが連用修飾語として述語の前に置くことができる。

他站得笔直。→他笔直地站着。

他吃得很慢。→他慢慢地吃。

他看得仔细。→他仔细地看。

このような場合は文が表わしている意味が基本的に同じであるが、強調する部分が違う。「得」補語文の強調する部分が「得」後の補語にあり、補語の部分が「得」前の部分より重いのである。これに対して、連用修飾語の場合は文の強調する部分が連用修飾語にあらず、述語にあるのである。つまり「得」補語の場合は文の中心が述語の後にあり、連用修飾語の場合は文の中心が述語にある。

4-1-3. 「得」補語文の場合は補語は多種多様な連語を使うことができるが、連用修飾語の場合は使える種類が少ない。

耳朵冻得通红。→耳朵通红地冻。×

起得比我还早。→比我还早地起来。×

累得筋疲力尽。→筋疲力尽地累。×

打扮得不象话。→不象话的打扮。×

商量得差不多了。→差不多地商量。×

气得直骂闺女。→直骂闺女地气。×

急得要死。→要死地急。×

4-2. 可能補語と程度・状態・結果補語との比較

可能の意味を表わす補語と程度・状態・結果の意味を表わす補語とは時には構造上ではまったく区別がなく、どちらの意味でも捉える場合がある。次の例を見よう。

他说得清楚。→彼ははっきりと言っている。

→彼ははっきり言える。

车开得快。→車は速く飛している。

→車は速く飛せる。

衣服洗得干净。→服はきれいにあらっている。

→服はきれいに洗える。

次は、このような場合の違いを考えてみよう。

4-2-1. 先ずこの種の文の否定式が違う。可能補語の否定式は「得」を「不」に変えさせる。程度などの補語の場合は「得」の後に「不」を加える。

他说得清楚。→他说得不清楚。(程度補語)

→他说不清楚。(可能補語)

可垒起了这混帐的东西，什么也看不见。(《短篇选》)(可能補語の否定式)

她爹这次病得不一般，要死要活的，一到新乡就大吐血。(《短篇选》)(程度補語の否定)

4-2-2. 可能補語の場合はよく趨向動詞を使うが、程度・状態・結果補語の場合は直接使わない。

当时，八舅脖子痛，一句话也反不上来。(《短篇选》)(可能補語)

要是院墙不倒他也看不出来。(同上)(可能補語)

离高考近了，同学们都变得自私起来，找得资料的，对没找到的保密。(同上)(結果補語)

4-2-3. 可能補語の場合は補語は比較的簡単なものが多く、補語の後に目的語を伴うことが可能である。程度・状態・結果補語の場合は補語は簡単なものもあれば、複雑なものもある。また補語の後に目的語を直接伴わないのが普通である。

只是科研方面，几十年来，他说不上有什么象样的建树。(《短篇选》)(目的語を伴う)

学生们噤若寒蝉，欣赏得五体投地。(《短篇选》)(目的語を伴わない)

4-3. 「得」補語と「個」補語との比較

4-3-1. 「個」補語¹⁵⁾構造は「得」補語構造とよく似ている。「個」補語は次のようなものがある。

(a) 述語と補語の間では「得」の代わりに「個」を使う。

喝个痛快。吃个饱。杀个鸡犬不留。

(b) 「個」の前に更に「了」を加える。

看了个清楚。 问了个详细。

- (c) 「個」の前に目的語「它」を加える。

吃它个痛快。玩它个够。打它个措手不及。

- (d) 「個」の後に「不」を加える。

骂个不休。下个不停。说个不完。

- (e) 「個」の前に更に「得」を加える。

打得个半死。打得个落花流水。

次は「得」補語構造と「個」補語構造の相違を見てみよう。

4-3-2. 先ず「個」補語の「個」は「得」に換えられるかどうかを見てみよう。

- (a) 「個」を「得」に換えることができるもの。

喝个痛快。→喝得痛快。

- (b) 「個」の前に「了」を加えたものについては、「了」を取ったら、「個」を「得」に換えることができる。

看了个清楚。→看了得清楚。×

→看得清楚。○

- (c) 「個」の前に「它」を加えたものについてはそのままでは換えられないが、「它」を取ったら換えられる。

吃它个痛快。→吃它得痛快。×

→吃得痛快。○

- (d) 「個」の後に「不」を加えたものについては「得」に換えることができない。

骂个不休。→骂得不休。

- (e) 「個」の前に「得」を加えたものについては「個」を取ったら、「得」補語になる。

打得个半死。打得半死。

4-3-3. 「個」補語の特徴として述語と「個」の間に「了」を加えたり、目的語「它」を差し入れたりすることができるが、「得」補語の場合はできない。

看了个清楚。→看了得清楚。×

吃它个痛快。→看它得痛快。×

4-3-4. 「得」補語の場合は補語の形容詞の前に「不」を加えることができるが、「個」の場合はできない。

喝得不痛快。→喝个不痛快。×

4-3-5. 「得」補語の場合はよく趋向動詞を使うが、「個」補語の場合は使わない。

透得进来。→透个进来。×

4-3-6. 「個」補語の場合は意志や願望の意味を表わすが、「得」補語の場合は可能を表わす。

吃个饱。吃得饱。 玩它个够。玩得够。

4-3-7. 「個」補語は結果や状態を表わすが、「得」補語は結果や状態を表わす外に可能の意味を表わす時もある。

看了个清楚。看得清楚。

打得个半死。打得半死。

おわりに

以上「得」補語文の構造、意味及び他の構造との比較などを考察してきたが、これらの考察を通じておよそ次のようなことが言えよう。

- ① 「得」という字はもともと「得る」という意味の他動詞として使っていた。およそ漢の時代から、この「得」は動詞の前から動詞の後に置くようになった。そしてその実の意味がだんだん薄くなって、およそ唐の時代から現在のような補語助詞になったのである。
- ② 「得」補語文では「得」前の述語として使えるのは動詞、形容詞しかない。また「得」と述語の間には他の言葉を加えることができない。「得」前の主語が前の文の主語などを受けて省略することができる。
- ③ 「得」補語は多種多様な形がある。動詞、形容詞、名詞、代詞、副詞及びそれらの連語、文などが補語として使える。「得」補語は特別な場合を除いては省略ができない。
- ④ 「得」補語は程度、状態、結果、時間、数量、判断、可能などの意味を表わす。
- ⑤ 「得」補語文では文の強調する部分は述語にあらず、「得」補語そのものにある。
- ⑥ 可能の意味を表わす「得」補語は肯定式よりも否定式の方がよく使われている。また「得」の前に置く動詞、形容詞は単音節のものが多い。
- ⑦ 可能の意味を表わす「得」補語は時には程度・状態・結果などを表わす補語と構造がまったく同じである場合があるが、否定式がまったく違う。
- ⑧ 「個」補語は「得」補語とよく似ているが、主な違いは「個」補語の場合は「個」の前に目的語を直接伴うことができるが、「得」補語の場合はできない。

注

- 1) 補語をつなぐ「得」はその品詞分類に関しては、意見が分れていて、いまだにまだ統一されていない。王力氏は「真正的詞尾」としている。それに対して、呂淑湘氏は「助詞」とみなす。朱德熙氏は可能の補語をつなぐ「得」は助詞として見るが、可能補語以外の「得」は「動詞後綴」とする。王力氏の『漢語史稿』（科学出版社1980年）、呂淑湘氏の『現代漢語八百詞』（商務印書館1981年）、朱德熙氏の『語法講義』（商務印書館1982年）参照。
- 2) 朱德熙氏の『語法講義』では「看过三次」のような文は「準賓語」とする。
- 3) 朱德熙氏は「说个清楚」のような文を「程度賓語」とする。
- 4) 朱德熙氏は「処所・時間賓語」とする。
- 5) 潘允中『漢語語法史概要』中州書画社1982年。
- 6) 岳俊発「得字句的產生和發展」『語言研究』1984年二号。
- 7) 楊建国「補語式發展試探」《語法論集第三集》中華書局1959年。
- 8) 王力『漢語史稿』中冊、科学出版社1981年。
- 9) 注6 参照。
- 10) 注7 参照。
- 11) 岳俊発の「得字句的產生和發展」の論文では明代の小説『古今小説』、『警世恒言』、『醒世恒言』、『西遊記』、『水滸伝』ではいずれも「V得OC」構造は「V得CO」構造より用例が多いと指摘している。
- 12) 『1983～1984年全国優秀報告文学評選獲獎作品選』の略称、作家出版社。
- 13) 『1987年短編小説選』の略称、人民文学出版社。
- 14) 劉月華「可能補語用法的研究」『中国語文』1990年4期。
- 15) 丁声樹氏の『現代漢語語法講話』商務印書館、唐啓運氏の『句子成分論析』上海教育出版社では「得」、「得個」でつなぐものは補語とされている。朱德熙氏『語法講義』では程度賓語としている。